

《翻訳・注釈》

フォティオス『文庫』におけるクテシアス『ペルシア史』摘要

— アルタクセルクセス1世からアルタクセルクセス2世の治世まで —

阿部拓児

(解説)

クニドス出身のクテシアスは、前5世紀末から前4世紀初頭に活躍した医者かつ歴史家であり、『ペルシア史』や『インド誌』などの作品を著わした¹⁾。多くの古典作品がそうであるようにクテシアスの著作群もまた、わずか一片のパピルス文書(*POxy* 2330)を除き、そのすべてが歴史の中で散逸してしまった。しかし幸いなことに、クテシアスに続く古典作家たちが作中で彼の著作を引用、言及し、その一部が現在にまで伝わっており(いわゆる「断片史料 (Fragmenta)」)。以下、**F**と略記)、したがってクテシアス作品を実際に手にすることができないわれわれも、これらの断片史料を用いることによって間接的に彼の作品を論じることが許されるのである。

これら断片史料を残した作家のうち、クテシアス研究上もっとも重要な人物は、9世紀ビザンツ帝国の大学者フォティオスである。フォティオスは弟宛に書いた読書案内書『文庫』の「クテシアス」の項(第72項)で、『ペルシア史』第7巻²⁾から最終巻までと『インド誌』を要約した。クテシアス研究は、まずもってこのフォティオスによる摘要を読み解くところから開始すると言っても過言ではない。

ところで当然のことながら、クテシアス作品を議論する際には常に、クテシアスとわれわれをつなぐ作家たち、とりわけフォティオスが原著をどれほど正確に伝えているのかという問題がつきまとう。フォティオス自身は『文庫』の序文で「主題は記憶が赴く順に扱われるであろう」(*Phot. Bibl. pref.*)と述べ、記憶を頼りに摘要を作成したかのような印象を与えるが、ほとんどの研究者は記憶とともに何らかの覚書を頼って作業したと想定している³⁾。「クテシアス」の項に限ってみると、やはり読書メモのようなものを用いたと考えるのが妥当なようである。なぜならば、『インド誌』の摘要中には「(その一角獣の足首の関節は)私が今までみた中で、もっとも見事な関節であった」(*F* 45. 45)という記述が

1) クテシアスの経歴について、詳しくは阿部(2007b)を参照。

2) 『ペルシア史』は全23巻から構成されており、第6巻まではペルシア帝国前史としてアッシュリア史とメディア史が論じられている。

3) Cf. 阿部(2007b), 45.

みられ、ここで言う「私」とはクテシアス自身を指していると考えられることから、抜書きの存在が示唆されるのである。また『ペルシア史』の最終諸巻、特に小キュロスの反乱以降の出来事を扱った箇所では（F 14. 63以降）、摘要は文章の態をなさず、名詞句の羅列となっており、このこともメモの存在を窺わせる。おそらくフォティオスは、読書時にキイ・ワードを拾い書きし、その読書メモから記憶を喚起して摘要を作成していったのではなかろうか。

以上のように想定すれば、われわれはフォティオスの摘要をかなりの程度、信頼して扱うことが許されるように思われる。しかしながら、フォティオスがいかに原著の情報を圧縮したかに目をむけると、結論はそれほど容易ではない。クテシアスはカンビュセスの即位からクセルクセスの暗殺までを『ペルシア史』第12、13巻の2巻を当てて論じており⁴⁾、これはフォティオス『文庫』では37a26⁵⁾から40a5までの2頁半に相当する。いっぽうで、アルタクセルクセス1世の治世にかんしては、クテシアスは第14巻から第17巻までの4巻を費やすが、フォティオスはそれを2頁弱（40a5-41b37）に収めている。『ペルシア史』の諸巻にほぼ同量の紙幅が割かれていると仮定するならば、フォティオスは時代が下るにつれ、多くの情報を間引いていることが分かる⁶⁾。したがって、フォティオスは、原著の内容自体はある程度正確に、しかし情報量は不均等に圧縮して伝えていると推測できよう。

本稿では、かかるフォティオスによるクテシアス『ペルシア史』第14巻から第23巻（アルタクセルクセス1世からアルタクセルクセス2世治世まで）の摘要を翻訳・付注する。この箇所はペルシア戦争以後、すなわちヘロドトス『歴史』が扱っていない時代を論じており、現在われわれが有するもっとも詳細なギリシア語によるペルシア帝国史の同時代史料となる。このように述べると、その史料の価値はきわめて高いように思われるであろう。しかし実際には多くの個性的な宦官や王族女性が登場して、必要以上に読者の興味を引く内容となっており、それゆえ史料として用いる場合には慎重な態度を要するのである。

なお、底本はランファン編のビュデ版⁷⁾を用いる。訳者はすでに同じく『ペルシア史』前半分の摘要を発表しており（本誌第7号、2007年、17-36頁）、他の近代語訳および書式についてはそれを参照されたい。

4) 「(クテシアスは) 第7, 8, 10, 11, 12, 13巻ではキュロス, カンビュセス, マゴス僧, ダレイオス, クセルクセスについて詳述する」(T 8) と「第12巻はカンビュセスの即位によって始まる」(F 13. 9) から計算。

5) フォティオス『文庫』の頁表記法は、19世紀初頭のイマニュエル・ベッカー編の頁数に従うのが一般的である。37a26とは、ベッカー編の37頁, Aコラム, 26行目を意味する。

6) アルタクセルクセス2世の治世にかんしては、クテシアスは第20巻から第23巻までの4巻を費やすが、フォティオスはそれをわずか1頁（43b3-44b19）に収めており、内容が相当に圧縮されていることが分かる。ただし、この箇所は名詞句が羅列されているだけなので、情報量に比して記述量は少なくなっており、また省略された情報や文脈をプルタルコス『アルタクセルクセス伝』から補うことができる。

7) D. Lenfant (2004).

(訳注)

アルタクセルクセス1世の治世

アルタクセルクセス1世の即位とアルタパノスの陰謀

F14 (34) アルタクセルクセス⁸⁾はアルタパノス⁹⁾に説得されて即位したが、今度は彼がアルタパノスの陰謀の標的となった。計画の仲間として、アルタパノスはメガビュズス¹⁰⁾——彼は自分の妻アミュティスが姦通しているのではないかと疑って、悩んでいた¹¹⁾——を選んだ。彼らは互いに決行を誓ったが、メガビュズスが計画のすべてを暴露したので、アルタパノスは彼自身がアルタクセルクセスを殺害する予定だった方法で殺された。クセルクセスとダレイアイオス¹²⁾にたいする悪巧みもすべて明らかとなり、クセルクセスとダレイアイオス殺害の協力者であったアスパミトレス¹³⁾はもっとも下劣で苦痛を伴う処刑方法で殺された。すなわち、彼は飼い葉桶¹⁴⁾に入れられて殺されたのである。アルタパノスの死後、彼の仲間とその他のペルシア人との間で戦争が起こり、アルタパノスの3人の息子が戦死した。メガビュズスも重傷を負い、アルタクセルクセス、アミュティス、ロドグネ¹⁵⁾と彼らの母アメストリスは嘆き悲しんだが、コスの医者アポッロニデスの熱心な治療によって一命を取り留めた。

バクトリアの反乱

(35) バクトラ¹⁶⁾とその地の総督アルタパノス——前節のアルタパノスとは別人——がアルタクセルクセスから離反し、両者相譲らない戦争が起きた。二度目の戦闘時に風がバクトリア人の顔に向かって吹いて、アルタクセルクセスが勝利し、バクトリア全土が彼に服従した¹⁷⁾。

8) 一般にアルタクセルクセスと表記されるが、フォティオスの原文に従い、訳文中ではアルタクセルクセスと表記する。

9) アルタクセルクセス1世の父クセルクセスを暗殺した人物 (Cf. F 13. 33)。

10) クセルクセスの女婿。クテシアスはメガビュズスを英雄の人物として描く傾向がある。Cf. T.S. Brown (1987)。

11) これより以前にもアミュティスは、姦通の件で父クセルクセスに注意されている (F 13. 32)。

12) クセルクセスの息子の一人。クセルクセス暗殺の容疑をかけられ、処刑される (F 13. 33)。

13) クセルクセスの有力宦官で、アルタパノスと協力してクセルクセスを暗殺した (F 13. 33)。

14) プルタルコス『アルタクセルクセス伝』(Plut. *Artax.* 16 = F 26)によれば、飼い葉桶の刑とは大略以下のような処刑方法である。まず、体を隙間なく覆うような特製の飼い葉桶を作り、その中に罪人を入れ、頭と手足だけを外に出す。次に、罪人に無理やりに食事を与え、食後は顔一面に蜜と乳を塗り、太陽の方向を向かせて飼い葉桶を放置する。すると顔に蠅が集り卵を産むので、やがて排泄物が溜まった飼い葉桶の中で蛆や虫が湧き、罪人の肉体を蝕み、最終的に死に至らしめる。

15) クセルクセスとアメストリスの娘 (F 13. 24)。

16) バクトリアの首都。

17) この箇所は、文脈が不明瞭になっている。おそらくフォティオスが必要以上に情報を圧縮したためと思われる。

エジプトの反乱

(36) エジプトが離反した¹⁸⁾。リビュア人¹⁹⁾ イナロスとあるエジプト人²⁰⁾ が離反を計画し、戦争の準備をしていたのである。イナロスの求めに応じ、アテナイ人が40隻の艦隊を派遣した。アルタクセルセスは親征を計画したが、友人たちに諫められたので、弟アカイメニデスの麾下に40万の歩兵軍と80隻の艦隊を派遣した²¹⁾。イナロスはアカイメニデスと戦って、エジプト軍が勝利した。アカイメニデスはイナロスに槍で突かれて戦死し、彼の遺骸はアルタクセルセスのもとへ移送された。イナロスはまた海上でも勝利し、アテナイから派遣された40隻の艦隊提督であったカリティミデスが名を揚げた。50隻のペルシア艦隊のうち20隻が乗組員ともども捕獲され、30隻が破壊された。

メガビュゾスの派遣

(37) 続いてメガビュゾスが反乱鎮圧に派遣された²²⁾。メガビュゾスは、以前の戦闘で生き残った者に加えて、別に20万の軍勢とオリスコス麾下の300隻の艦隊を指揮した。これで、艦隊を別にしても50万人の軍勢になった。アカイメニデスが斃れたときに、彼が率いていた40万人のうち10万人がともに戦死したのである。メガビュゾスがエジプトに到着すると、激しい戦闘が起こり両陣営から多数の戦死者が出たが、エジプト軍の戦死者のほうが上回った。メガビュゾスはイナロスの腿に傷を負わせ、彼を撃退し、ペルシア軍が力づくで勝利した。イナロスはビュプロス²³⁾ (ビュプロスはエジプトの要塞都市である) へ逃げ、カリティミデスとともに戦死せずに、生き残ったギリシア人たちも逃げ込み、ビュプロスを除いたエジプト全土がメガビュゾスに屈した。

-
- 18) イナロスの反乱については、ヘロドトス (3. 12; 7. 7) やトゥキュディデス (1. 104; 109-110) も言及している。それらの異同については、各々の註および、J.M. Bigwood (1976) を参照。
- 19) フォティオスの原文では「リュディア人」イナロス。しかし、エジプトの反乱であることや、イナロスはリビュア人であったというヘロドトス『歴史』(3. 12; 7. 7)、トゥキュディデス『歴史』(1. 104) の記述を考慮すれば、リビュア人イナロスとするのが自然であろう。「リュディア人」は、クテシアス、フォティオス、写字生のいずれかの単純な誤りであったと考えられる。
- 20) ヘロドトス『歴史』(3. 15) は、エジプトで反乱を起こした人物として、イナロスとアミュルタイオスの名を挙げている。なお、クテシアス『ペルシア史』(F 13. 10) では、カンビュセスによるエジプト征服時にアミュルタイオスという名の王が登場する。
- 21) ヘロドトス『歴史』(3. 12; 7. 7) では、イナロスの反乱鎮圧に派遣されたのは、アルタクセルセスの弟アカイメニデスではなく、ダレイオスの子(すなわちアルタクセルセスの叔父)アカイメネスである。
- 22) メガビュゾスのエジプト派遣については、ヘロドトス (3. 160) やトゥキュディデス (1. 109) も言及している。
- 23) ビュプロスの位置、実在性は不明。トゥキュディデス『歴史』(1. 109) では、イナロスはプロンピティス島に逃げ込んだことになっている。Cf. J.M. Bigwood (1976), 23-25.

エジプト征服

(38) ビュプロスは難攻不落のように思われたので、メガビュズスは、彼らが王からいかなる処罰も受けず、ギリシア人は彼らが望むときに帰郷できるという条件で、イナロスおよびギリシア人——6000人かそれ以上——と和約を締結した²⁴⁾。

サルサマスをエジプト総督に据えると、メガビュズスはイナロスとギリシア人たちを捕らえて、アルトクセルクセス²⁵⁾のもとへ連行した。というのも、弟アカイメニデスが殺されたことによって、アルトクセルクセスはイナロスにたいしてひどく怒っていると考えたからである。メガビュズスは事件の経過と、イナロスとギリシア人に保障を与えてビュプロスを占領したという事情を説明し、熱心に訴えて、王に彼らの身の安全を約束させた。ついに、イナロスとギリシア人にはいかなる害も加えてはならないとする通達が、軍隊にもたらされた。

王母アメストリスの復讐

(39) アメストリス²⁶⁾は、息子アカイメニデスが殺されたのにイナロスとギリシア人に復讐できないことを耐え難く感じた。そこで彼女は王に復讐を請うたが、王は肯んじなかった。次に、彼女はメガビュズスに詰め寄ったが、彼は王母の要求を拒絶した。再度自分の息子に圧力をかけると、彼女は復讐に成功した。事件から5年が経過した後、アメストリスは王からイナロスとギリシア人の身柄を引き受け、イナロスを3本の杭で磔刑にかけた。また、彼女の捕らえることができた50人のギリシア人を^{みんけい}刎頸に処した。

メガビュズスの反乱

(40) メガビュズスはいたく落胆し、失意のなか自国シュリアに戻ることを願い出た。彼は処刑を逃れたギリシア人たちを前もって秘密裏にシュリアに送っており、自分が帰郷すると、王から離反した。騎兵を除いても²⁷⁾、15万人にも上る戦力を集めた。ウシリスが20万の軍勢を率いてメガビュズス鎮圧に派遣された。戦闘が起こり、メガビュズスとウシリスは互いに攻撃を仕掛け、ウシリスは槍でメガビュズスの腿を突き、指2本分の深さの傷を負わせた。いっぽう、メガビュズスも同様に槍でウシリスの腿を傷つけ、次に肩を突いた。ウシリスは落馬したが、メガビュズスはウシリスをかばい、彼を連れて帰り、助けるよう

24) トゥキディデス『歴史』(1. 110)は、イナロスは交渉によって投降したのではなく、裏切り行為によって捕らえられたと伝える。

25) 写本ではクセルクセスだが、むしろアルトクセルクセスの誤り。ビッグウッド(J.M. Bigwood (1976), 8)は、写字生が非ギリシア語の人名に不慣れであったため、このような単純な人名誤記が多々確認されると指摘している。

26) 写本ではアミュティス。しかし、アルトクセルクセスおよびアカイメネスの母はアメストリスであり(F 13. 24)、これは明らかな誤り。

27) 写本では「騎兵と歩兵を含めずして」と書かれているが、これは明らかに誤りであろう。「歩兵」を削った。

部下に命じた。ペルシア軍からは多くの戦死者が出た。メガビュゾスの息子ゾピュロスとアルテュフィオスが勇敢に戦い、メガビュゾスは圧倒的な勝利を収めた。メガビュゾスは熱心にウシリスを治療して、申し出を受け入れて彼をアルトクセルクセスのもとへ帰した。

メノスタテスの派遣

(41) アルタリオスの子メノスタテスが、新たな軍勢とともにメガビュゾス鎮圧に派遣された。アルタリオスはバビュロン総督で、アルトクセルクセスの兄弟である²⁸⁾。両軍が激突し、ペルシア軍は敗退した。メノスタテスはメガビュゾスの攻撃を肩に受け、頭に矢が刺さったが、致命傷には至らなかった。しかし、メノスタテスは部下とともに撤退し、メガビュゾスは輝かしい勝利を収めた。

メガビュゾスの反乱終結

(42) アルタリオスはメガビュゾスに使節を送り、王と和約を結ぶように忠告した。メガビュゾスも和約を望んでいることを明らかにしたが、彼が王に協力せずに自国に留まるという条件を提示した。このことが王に伝えられると、パフラゴニア人の宦官アルトクサレスと王母アメストリスはすぐに和約を結ぶように進言した。そこで、アルタリオス自身とメガビュゾスの妻アミュティスとアルトクサレス——すでに20歳になっていた——、またウシリスの子でスピタマスの父ペテサスが派遣された。彼らは様々な宣言や交渉でメガビュゾスを納得させ、ようやく王に謁見するよう説得した。メガビュゾスが到着すると、王はついに過去の過ちに赦免を与えた。

メガビュゾスの追放と死去

(43) 王が狩猟に出かけた際、ライオンに襲われた。ライオンが飛び跳ねた瞬間に、メガビュゾスは槍を投げてライオンを始末した。アルトクセルクセスは自分よりも先にメガビュゾスが槍を投げたことに怒って、彼を打ち首にするように命じた。王母アメストリス、メガビュゾスの妻アミュティス、その他の者たちの嘆願により、彼は処刑を赦されたが、紅海のキュルタという町に追放された。宦官アルトクサレスもまた、アルメニアに追放された。というのは、彼はしばしば王の面前でメガビュゾスを公然と擁護していたからである。

5年の流刑生活を送った後、メガビュゾスは「ピサガス」に扮して逃れてきた。ペルシア語では重い皮膚病のことを「ピサガス」と呼び、罹患者には誰も近寄って来ない²⁹⁾。かくして彼は逃れてくると、妻アミュティスと家族のもとへ戻り、何とかメガビュゾス本人だと信じてもらえた。アメストリスとアミュティスの説得を受けて、王はメガビュゾスと

28) クセルクセスとアメストリスの子供たちを紹介する箇所 (F 13. 24) では、アルタリオスの名前や彼の母親にかんする言及は見当たらないため、アルタリオスはクセルクセスの異母兄弟の可能性がある。

29) ペルシアでは誰もレブラ患者に近づかないという記述は、ヘロドトス『歴史』(1. 138)にも確認できる。

和解し、以前と変わらず彼を陪食人^{ホモトラベゾス}³⁰⁾とした。76歳でメガビュゾスが死ぬと、王は大いに落胆した。

医師アポッロニデスによる王女アミュティス侮辱

(44) メガビュゾスの死後、彼の妻アミュティスはしきりに男性と交わるようになった³¹⁾。母アメストリスも、彼女より先に、同様のことをしていた。アミュティスが病に伏せたとき、深刻な病症ではなかったのだが、コスの医者アポッロニデス³²⁾が彼女に恋をし、子宮が原因の病気だから、男性と関係を持てば快復するだろうと診断した³³⁾。アポッロニデスの作戦は功を奏し、アミュティスと恋仲になったが、彼女が衰弱していったので彼は関係を終わらせた。死の床で彼女は、アポッロニデスの復讐を母に依頼した。母はすべての事情を、すなわち彼がどのように恋仲になったのか、どのようにアミュティスを侮辱した上で関係を終わらせたのか、娘がどのようにアポッロニデスの復讐を望んでいたかについて、王アルトクセルクセスに打ち明けた。王は母の好きにすることを黙認した。そこで、彼女はアポッロニデスを捕らえて鎖につなぎ、2ヶ月間拷問にかけた。その後アミュティスが死ぬと、アポッロニデスを生き埋めにした。

ゾピュロスのアテナイ亡命

(45) メガビュゾスとアミュティスの子ゾピュロスは、両親の死後、王から離反してアテナイに去った³⁴⁾。というのも、彼の母がアテナイを最恨にしていたからである。彼は仲間たちとカウノス³⁵⁾へ入港し、都市を明け渡すよう命じた。カウノス人たちは、ゾピュロスには都市を明け渡してもよいが、彼に随行して来たアテナイ人には渡すつもりはないと伝えた。ゾピュロスが入城すると、カウノス人アルキデスが彼の頭上に石を落とし、ゾピュロスを殺した。彼の祖母アメストリスはカウノス人アルキデスを磔刑に処した。

30) 「ホモトラベゾスὀμοτράπεζος」はギリシア語で「食卓を供にする者」の意で、ペルシアの身分としてギリシア語文献にしばしば登場する。Cf. Hdt. 3. 132; Xen. An. 1. 8. 25; Xen. Cyr. 7. 1. 30.

31) これより以前にも、アミュティスの不貞については二度言及されている (F 13. 32; F 14. 34)。

32) アポッロニデスは以前、アミュティスの亡夫メガビュゾスが重傷を負った際の担当医であった (F 14. 34)。

33) ヒッポクラテス『生殖について』(4)、『婦人病について』(7)は、性交と女性の健康との関係について論じている。ヒッポクラテスはアポッロニデスと同じくコス出身であり、したがってアポッロニデスはコス学派の学説を根拠に、このような発言をしたと推測できよう。ここでのアポッロニデスの悲惨な最期に、エックはコス学派とクニドス学派の対立を読み取っている。B. Eck (1990), 411.

34) ヘロドトス『歴史』(3. 160)にも同様の記述を見出せる。

35) 小アジア南西部カリアの都市で、デロス同盟に加盟していた。

アルタクセルクセス1世の死去

(46) アメストリスは長寿をまっとうし、またアルタクセルクセスは42年間統治して世を去った。ここで歴史書の第17巻が終わり、続いて18巻が始まる。

王位争奪の混乱期

クセルクセス2世の即位

F15 (47) アルタクセルクセスが死に、王子クセルクセスが即位した。クセルクセスはダマスピアが生んだ唯一の嫡子である。ダマスピアはアルタクセルクセスと同じ日に死んだ。バゴラズス³⁶⁾がクセルクセスの両親の遺骸をペルシアへ送り返した。アルタクセルクセスには17人の非嫡出の息子がいたが、その中にはバビュロニア人のアログネが生んだセキュンディアノス³⁷⁾、また同じくバビュロニア人のコスマルティデネが生んだオコスおよびアルシテスがいた。オコスは後に王になった。今述べた子らに加えて、アルタクセルクセスの子供には同じくバビュロニア人のアンディアが生んだバガパイオスとパリュサティスもいた。

このパリュサティスはアルタクセルクセスとキュロス³⁸⁾の母となった。父親は存命中、オコスをヒュルカニア総督とし、また彼にパリュサティスという名の妻を与えた。パリュサティスはアルタクセルクセス³⁹⁾の娘でオコス自身の姉妹⁴⁰⁾である。

クセルクセス2世の暗殺

(48) セキュンディアノスは、宦官ファルナキュアス——彼はバゴラズス、メノスタネスやその他の何人かに次ぐ高官であった——を味方に付け、ある祝祭日にクセルクセスが沈酔したすきに、宮殿に侵入して彼を殺した。それはクセルクセスの父の死から45日後のことであった。

そこで、親子の遺骸はともにペルシアに送られた。事実、まるで息子の死を待っていたかのように、父母の遺体を載せた馬車引きの騾馬は出発しようとしなかったのである。息子の遺体が積み込まれると、騾馬はひたむきに走った。

36) ここでは明記されていないが、先王の遺骸をペルシアに移送するのは宦官の仕事であったという先例に鑑みると、バゴラズスは宦官であったと考えられる。

37) デイオドロス『歴史叢書』(12.71)では、ソグディアノスの名で登場する。

38) アルタクセルクセス2世と小キュロスのこと。この兄弟は後に王位をめぐる対立する。

39) 写本ではクセルクセスだが、明らかな誤り。

40) 異母兄弟の関係にあたる。

セキュンディアノスの即位

(49) セキュンディアノスが即位し、メノスタネス⁴¹⁾は彼の「アザバリテス」⁴²⁾となった。バゴラズスはペルシアへ赴いていたが⁴³⁾、セキュンディアノスのもとへ戻ってきた。彼らの間に以前からあった敵意がくすぶり出し、バゴラズスは王の同意なしに彼の父の遺骸を捨てたという口実で、王命によって石打の刑に処された。軍はこの事件に深く悲しんだので、王は贈物を下賜した。しかし、軍はセキュンディアノスの兄弟クセルクセスとバゴラズスを殺したことで、セキュンディアノスを憎んだ。

ダレイオス2世の治世

オコス即位とセキュンディアノス暗殺

(50) セキュンディアノスはオコスに使者を派遣して、呼び寄せた。彼は約束したものの、セキュンディアノスのもとに赴くことはなかった。そのようなことが何度か起きた。ついにオコスは大軍を集め、周囲は彼の即位を期待した。まずセキュンディアノスの騎兵隊長アルバリオスとエジプト総督アルクサネスが離反しオコスのもとへ参じた。アルメニアから宦官アルトクサレスがオコスのもとへ到着し⁴⁴⁾、彼らはオコスの意思に反し、彼に王冠をかぶせた。

王になると、オコスは名をダレイアイオス⁴⁵⁾に変えた。妻パリュサティスの提案で、オコスはあの手この手でセキュンディアノスを追い詰めた。メノスタネスはセキュンディアノスに、ダレイアイオスの言葉を信用しないように、騙そうとする人たちと手を結ばないように何度も注意した。それにもかかわらず、彼は術中にはまり、捕らえられて灰の中に投げ込まれ⁴⁶⁾、6ヶ月と15日の治世の後、死んだ。

-
- 41) メノスタネスはセキュンディアノスおよびダレイオス2世の従弟、すなわち彼らの父（アルタクセルクセス1世）の弟（アルタリオス）の子にあたる（Cf. F 14. 41）。
- 42) ペルシア語の *hazarapatiš* をギリシア語の音に置換した語であるとするならば、「千人隊長」という意味になる。
- 43) バゴラズスはこのとき、アルタクセルクセス、ダマスピア、クセルクセスの遺骸をペルシアへ運んでいた（Cf. F 15. 47-48）。
- 44) アルトクサレスはかつてアルタクセルクセスの前でメガビュゾスを擁護したために、アルメニアに追放されていた（F 14. 43）。
- 45) 一般にダレイオスと表記されるが、フォティオスの原文に従い、訳文中ではダレイアイオスと表記する。
- 46) ウァレリウス・マクシムス（紀元1世紀）は『著名言行録』（9. 2. 6）で、この刑を紹介している。それによれば、灰の刑の処刑方法は以下の通り。まず高い壁に囲まれた部屋に灰を敷き詰め、その上に梁を通す。犠牲者は無理やり飲食をさせられた後、梁に上らされる。満腹感から犠牲者が眠ってしまうと、彼は（熱い？）灰の上に落ちて死ぬ。

ダレイオス2世の側近

(51) オコス、またの名をダレイアイオスは単独で王位に就いた。3人の宦官が宮廷で影響力を持っていた。もっとも力を持っていたのはアルタクサレス、次いでアルティバルザネス、3番目にアトオスであった。しかし、彼は主に妻の意見に従った。この妻から、ダレイアイオスは即位の前に2人の子を得ていた。娘アメストリスと息子アルサケス⁴⁷⁾で、アルサケスは後にアルタクセルクセス⁴⁸⁾と名を改めた。王妃となった後に、パリュサティスはまた別の息子を産み、名を太陽からとりキュロスと名づけた。それから、彼女はアルトステスなど、次から次へと13人の子を産んだ。クテシアスはこのことについて、彼自身がパリュサティス本人から聞いたと主張する。

しかし、子供たちのうち他の子たちは夭折した。成長した子は、ここで言及した人物と、オクセンドラスという名の四男だけである⁴⁹⁾。

アルシテスとアルテュフィオスの反乱

(52) 王ダレイアイオスの同父同母の兄弟アルシテスとメガビュプスの子アルテュフィオス⁵⁰⁾が王から離反した。彼らの鎮圧にアルタシュラスが派遣され、アルテュフィオスと戦った。アルタシュラスは2度の戦闘で敗れた。その後再び戦闘が起こり、彼はアルテュフィオスを負かし、贈物によって彼のもとにいたギリシア人を誘い出したので、アルテュフィオスのもとには3人のミレトス人傭兵しか残らなかった。アルシテスは姿をみせなかったので、結局アルテュフィオスはアルタシュラスから出された宣言と保障を受け入れて、王に服従

47) プルタルコスは、クテシアスによればアルタクセルクセスの幼名はアルシカスであったと、またデイノンによればオアルセスであったと記している (Plut. *Artax.* 1 = Ctes. F 15a = Deionon, *FG+H* 690 F 14)。なお、クテシアス『ベルシア史』とデイノン『ベルシア史』との異同については、R.B. Stevenson (1997) に詳しい。

48) アルタクセルクセス2世のこと。これ以降、クテシアス『ベルシア史』のアルタクセルクセスにかんする叙述は、プルタルコス『アルタクセルクセス伝』中にも、より詳細に伝えられている。また、クテシアスとは別系統の同時代史料として、クセノフォン『アナバシス』が伝存し、デイノン『ベルシア史』が同じくプルタルコス『アルタクセルクセス伝』中に引用されている (クセノフォン『アナバシス』、デイノン『ベルシア史』はともに、クテシアス『ベルシア史』よりも後に執筆されている)。本稿「解説」でも述べたように、フォティオスの摘要はアルタクセルクセス2世の治世に入ってから、徐々に名詞句の羅列へと変化していき、前後関係が著しく不明瞭になっていく。したがって、以下の註では『アルタクセルクセス伝』、『アナバシス』から可能な限り情報を補い、文脈を説明していく。

49) ダレイオスとパリュサティスの子として、クセノフォンはアルタクセルクセスとキュロスの二子 (Xen. *An.* 1. 1. 1)、プルタルコスはアルタクセルクセス、キュロス、オスタネス、オクサトレスの四子がいたと伝える (Plut. *Artax.* 1 = F 15a)。プルタルコスとフォティオスは同じクテシアス『ベルシア史』に依拠しながら、しばしば人名表記上の単純な異同が確認できる。引用者および字生がベルシア語名に不慣れであったために起きた現象であろう。Cf. R.B. Stevenson (1997), 26.

50) ダレイオスにとっては従弟、すなわち父 (アルタクセルクセス1世) の妹 (アミュティス。メガビュプスの妻) の子にあたる。なお、アルテュフィオスは先にアルタクセルクセス1世から離反したゾピュロス (F 14. 45) とは兄弟になる。Cf. 14. 40.

した。

アルテュフィオスを処刑しようとした王に、パリュサティスはしばらくの間は殺さないように意見した。アルシテスを投降させるための手段に使えるだろうとの理由からである。アルシテスを騙して捕らえた後、改めて反乱者二人を処刑しなければならないと言った。彼女の作戦は計画通りに成功し、アルテュフィオスとアルシテスは灰の中に投げ込まれた。王は自身の兄弟であるアルシテスを殺したくはなかったが、パリュサティスが王を説得しつつも、半ば強引に処刑した。セキュンディアノスとともにクセルクセスを殺害したファルナキュアス⁵¹⁾も、石打ちの刑で処刑された。メノスタネス⁵²⁾も捕らえられ、処刑される前に自殺した。

ピストネスの反乱

(53) ピストネスが反乱を起こし⁵³⁾、ティッサフェルネス、スピトラダテス、バルミセスが鎮圧に派遣された。ピストネスは、アテナイ人リュコンと彼が指揮するギリシア軍の援助を得て、進撃した。王の将軍たちはリュコンとギリシア軍を金で買収して、ピストネスから離反させた。その後、彼らはピストネスに身の保障を与え、彼を捕らえて王の面前に引きずり出した。王は彼を灰の中に投げ込んで、ピストネスの総督領をティッサフェルネスに与えた。リュコンは裏切りの代償に、数都市と領地を譲り受けた。

アルトクサレスの陰謀

(54) 宮廷で大きな影響力を持っていた宦官アルトクサレスは、自身が王になろうと欲し、王にたいして陰謀を企んだ。アルトクサレスはある女性に頼み、男らしくみえるように顎鬚と口髭を付けてもらったが、彼女が計画を暴露した。アルトクサレスは捕らえられ、パリュサティスに引き渡されて処刑された。

テリトゥクメスの反乱

(55) 王子アルサケス——彼は後にアルトクセルクセスと改名する——はイデルネス⁵⁴⁾の娘スタテイラを娶り、イデルネスの息子は王女を娶った。その娘の名は、アメストリスであった。婚の名はテリトゥクメスであった。彼は父の死後、父の総督位を継いでいた。

テリトゥクメスには同じ父から生まれたロクサネという名の姉妹がいた。ロクサネは見

51) Cf. 15. 48.

52) グレイオス2世の従弟で、セキュンディアノスの側近。Cf. F 15. 49; 本稿の註41。

53) ピストネスの名はトゥキュディデス『歴史』(1. 115; 3. 31; 3. 34)でも確認できる(ただし、同書ではピストネスの名で登場する)。またトゥキュディデスは、ピストネスの反乱には特に触れず、庶子アモルゲスの反乱について伝えている(8. 5; 8. 28)。

54) おそらく、グレイオス1世とともに僭王スフェンダダテスを誅殺したペルシア人貴族イデルネスの子孫だと考えられる(Cf. F 13. 15)。

目美しく、弓術と槍術に長けていた。テリトゥクメスはロクサネに恋し、彼女と同衾し、妻アメストリスのことを疎ましく思うようになった。ついに彼はアメストリスを袋に詰めて、ともに反乱を画策していた300人の仲間たちに彼女を刺し殺させる計画を立てた。しかし、ウディアステスという名の人物——彼はテリトゥクメスにたいし影響力があり、王女が助かった場合に授かる、多くの約束事が書かれた手紙を王から受け取っていた——は、テリトゥクメスを攻撃し、彼を殺した。テリトゥクメスは反乱中、勇敢に戦って多くの敵を殺した。伝えられるところでは、その数は37人にも上ったという。

イデルネス家の肅清

(56) ウディアステスの子ミトラダテスはテリトゥクメスの従者であったが、反乱には参加していなかった。後になって事件の経過を知ると、父を大いに呪った。彼はザリスの町を征服して、それをテリトゥクメスの子のために占守した。しかし、パリュサティスはテリトゥクメスの母、彼の兄弟ミトロステスならびにヘリコス、彼の姉妹（スタテイラの他に2人いた）を生き埋めにするように、特にロクサネについては、生きたまま切り刻むように命じ、それらは実行された。

王は妻パリュサティスに、息子アルサケスの妻スタテイラも同様にしよう指示した。しかし、アルサケスは大いに涙を流して嘆願し、父と母に赦しを請うた。パリュサティスが考えを変えると、オコスことダレイアイオスも譲歩したが、パリュサティスにひどく後悔するであろうと言った。

以上で、第18巻が終わる。

アルタクセルクセス2世の治世

ダレイオス2世の死とアルタクセルクセス2世の即位

F16 (57) 第19巻では、クテシアスはオコスことダレイアイオスが⁵⁵⁾35年の治世の後、バビュロンにてどのように病死したかを取り上げる。アルサケスがアルタクセルクセスと改名し、即位した。

スタテイラの復讐

(58) ウディアステスは舌を根元から引き抜かれ、死んだ。彼の息子ミトラダテスは父の後を継ぎ、総督となった。これは王妃スタテイラの要望によってなされ、パリュサティスは不満だった。

55) 実際の統治期間は20年程度であった。Cf. Diod. Sic. 12. 71; 13. 108; H. Swoboda (1901).

小キュロスの反乱準備

(59) キュロスは、兄王アルトクセルクセスの前でティッサフェルネスによって讒訴され⁵⁶⁾、母パリュサティスのもとへ逃げ、疑惑を晴らした。名誉を傷つけられたキュロスは兄のもとを離れ、自らの総督領へ行き、反乱を計画した。

サティバルザネスの讒訴

(60) パリュサティスはまったく節度を保っていたにもかかわらず、サティバルザネス⁵⁷⁾はオロンデスを、パリュサティスと同衾したとして讒訴した。オロンデスは処刑され、王母は王に怒った。

テリトゥクメスの息子の毒殺

(61) パリュサティスはテリトゥクメス⁵⁸⁾の息子を毒殺した。

火葬の慣習

(62) 慣習に反して、父親を火葬にした男について。これゆえ、クテシアスはヘッラニコスとヘロドトスを嘘つきと非難する⁵⁹⁾。

小キュロスの反乱

(63) キュロスの兄王からの離反、ギリシア人とバルバロイの軍勢召集、ギリシア軍の將軍クレアルコス。いかにキリキア王シュエンネシスがキュロスとアルトクセルクセスの双方に味方したかについて。いかにキュロスが彼の軍隊を鼓舞し、今度はアルトクセルクセスが自らの軍隊を鼓舞したかについて。ギリシア軍を指揮していたラケダイモン人クレアルコスとテッサリア人メノン——彼らはキュロスとともにいた——は常に不仲だった。というのもキュロスは何事につけてもクレアルコスに意見を求めて、いっぽうでメノンの意見を無視したからである。

多くの兵がアルトクセルクセス軍からキュロスのもとへ脱走したが、キュロス軍からアルトクセルクセスのもとへは誰も逃げなかった。それゆえ、アルバリオス⁶⁰⁾はキュロスの陣営に付こうとして非難され、灰の中に投げ込まれた⁶¹⁾。

56) プルタルコス『アルタクセルクセス伝』(Plut. *Artax.* 3 = F 17) に詳しい。ティッサフェルネスは、即位の儀式中にアルタクセルクセスが着物を脱いだ瞬間、キュロスが王を襲撃する予定だったと讒訴した。ティッサフェルネスはキュロスの教育係を務め、キュロスからも味方だと思われていたために (Cf. Xen. *An.* 1. 1. 2), この裏切りの讒訴はいっそう信頼を得た。

57) 王付きの宦官。この箇所以外にもサティバルザネスはクナクサの戦い (Plut. *Artax.* 12. 4 = F 20) やサラミス王エウアゴラスとの交渉の場面 (F 30. 73) で登場する。

58) F 15. 55に登場。パリュサティスの女婿で、王家にたいし反乱を起こした。

59) ヘロドトスは『歴史』(3. 16) で、ペルシア人は火葬をしないと述べている。

60) F 15. 50に登場する、セキュンディアノス軍の元騎兵隊長と同一人物か。

61) 灰の刑については、本稿の註46。

クナクサの戦いとキュロスの死

(64) キュロスによる大王軍にたいする攻撃ならびにキュロスの勝利⁶²⁾。しかしクレアルコスの忠言⁶³⁾を無視したゆえのキュロスの死⁶⁴⁾と兄王アルタクセルクセスによるキュロスの遺骸への侮辱。アルタクセルクセスはキュロスの頭と手——この手によってキュロスはアルタクセルクセスを攻撃した⁶⁵⁾——を切り落とし、凱旋した。

ギリシア傭兵軍の撤退

(65) ラケダイモン人クレアルコスおよびその麾下のギリシア軍の夜間撤退とパリュサティス所有の一都市の占領⁶⁶⁾。その後の、王とギリシア人との協定⁶⁷⁾。

パリュサティスによる復讐の開始

(66) パリュサティスがキュロスを悼んでバビュロンに赴き、かろうじてキュロスの頭と手を取り返し、葬儀の後、彼女がそれらをスサへ送ったことについて。

王の命令でキュロスの遺骸から頭部を切り離したバガパテス⁶⁸⁾の話。どのように王母が

62) クナクサの戦いの経過については、むろんクセノフォン『アナバシス』(1. 8)に詳しく、プルタルコスも諸家の意見が分かれるキュロスの最期を除いては、改めて叙述すべきではないという姿勢をとっている (Plut. *Artax.* 8)。なお、戦いをめぐるクセノフォン『アナバシス』とプルタルコス『アルタクセルクセス伝』所伝のクテシアス『ペルシア史』との比較については、J.M. Bigwood (1983)に詳しい。

63) クレアルコスはキュロスに後衛に陣取るよう忠告したが、王位をねらう人物に相応しからぬ行為だとして、キュロスはこの忠告を拒否した (Plut. *Artax.* 8 = F 18)。クセノフォンによれば、クレアルコスのみならず多くの人物が同様の忠告をしたという (Xen. *An.* 1. 7. 9)。

64) プルタルコスは、クテシアスが伝えるキュロスの最期について、かなり詳細に記述している (Plut. *Artax.* 11-13 = F 20)。キュロスはいったんアルタクセルクセスを攻撃し、傷を負わせたが、ペルシア人ミトラダテスに攻撃され、無名のカウノス人とどめを刺された。

65) 戦争中、キュロスはアルタクセルクセスと直接対決し、槍を投げて彼の胸に傷を負わせた (Plut. *Artax.* 11 = F 20)。この事件にかんしては、クセノフォンもキュロスの近辺に居合わせていなかったため、クテシアスの記述に依拠している (Xen. *An.* 1. 8. 26 = F 21)。なお、クテシアスは、王の傷を治療したのは自身であると主張している (T 6a; T 6aβ)。

66) クセノフォン (Xen. *An.* 2. 4. 27) は、ティッサフェルネスの許可のもと、ギリシア軍がパリュサティスの所有地を略奪したと伝える。ただし、この略奪は王と休戦協定が結ばれた後におこなわれており、クテシアスは別の事件を伝えているのかもしれない。

67) クセノフォンが伝える休戦協定の過程は以下の通り。クナクサの戦い直後、大王軍より使節が派遣され、ギリシア軍に武装解除を勧告した。このときクレアルコスは態度を保留する (Xen. *An.* 2. 1. 7-23)。翌日改めて使節が派遣され、今度は休戦の交渉をおこなうと、ギリシア軍はこの申し出を受け入れることにした (Xen. *An.* 2. 3. 1-10)。

なお、クテシアスはこのときの通訳使として自身が派遣されたと主張していたようであるが (Plut. *Artax.* 13 = T 15)、これに反してクセノフォンは使節団の中でギリシア人はファリノスただ一人だったと証言している (Xen. *An.* 2. 1. 7)。クテシアスが述べる自身の経歴にはこの種の脚色がしばしば確認でき、それゆえクテシアスはペルシア宮廷においていかなる立場にあり、そこで体験を『ペルシア史』執筆にいかにかしたかが不明となっている。Cf. 阿部 (2007b)。

68) プルタルコス『アルタクセルクセス伝』では、マサパテス名で伝わる (Plut. *Artax.* 17 = F 26)。

協定を結び、王と賽子遊びをし、勝利して、バガパテスを譲り受けたのかについて⁶⁹⁾。バガパテスがパリュサティスによって皮を剥がされ磔刑に処された方法。アルタクセルクセスの強い要請によって、パリュサティスがキュロス戦死の深い悲しみから立ち直ったことについて。

カリア人とミトラダテスの処刑

(67) アルタクセルクセスがキュロスの鞍下を持ってきた男に贈物を与え⁷⁰⁾、キュロスに傷を負わせたと思われるカリア人に褒美をとらせたことについて⁷¹⁾。パリュサティスが褒美を受けたそのカリア人を拷問にかけて殺したことについて⁷²⁾。

アルタクセルクセスが要請に従って、パリュサティスにミトラダテス——彼は宴席でキュロスを殺したことを自慢していた——を譲ったことについて⁷³⁾。パリュサティスは彼の身柄を引き受けると残酷に処刑した⁷⁴⁾。

これらのことが第19巻と20巻で述べられている。

-
- 69) プルタルコス『アルタクセルクセス伝』(Plut. *Artax.* 17 = F 26)によれば、大略以下の通りである。パリュサティスはキュロスの遺体を切断した宦官に復讐を試みたが、アルタクセルクセスはそれを許さなかった。そこで、パリュサティスは初め金銭を賭けて、王に賽子遊びを挑み、故意に負けた。次に、互いに任意の宦官を譲り受けるという条件で再び王に賽子遊びを挑み、今度は真剣勝負をして、賭けに勝った。
- 70) プルタルコス『アルタクセルクセス伝』(Plut. *Artax.* 14 = F 26)によれば、アルタクセルクセスはキュロスに最初の一撃を加えたミトラダテスを、「キュロスの鞍下を持ち帰った」という理由で賞した。このように功労者を不当に過小評価した理由は、王自らがキュロスを討ったと周囲から認識されなければならなかったからである。
- 71) プルタルコス『アルタクセルクセス伝』(Plut. *Artax.* 11 = F 20)によれば、件のカリア人とはカウノス(カウノスはカリア南西部の都市)出身者であった。大王軍に属するカウノス人の一団が、戦闘の混乱の中でキュロス軍側に紛れ込んでしまう。服装の違いから、敵方に紛れ込んだことに気付いたカウノス人の一人が、側にいた人物をキュロスだとは知らずに槍を投げ、次に石をぶつけて殺したのだという。
- 72) このカリア人は当初、キュロス戦死の報を伝えたという理由で、褒美に与った。しかし、褒賞を受けた後、不当に過小評価されたことを不満に思った彼は、自分がキュロスにとどめを刺したのだという真実を公表する。名誉を傷つけられた王は怒り、カリア人の打ち首を命じたが、パリュサティスが王に願い出て、身柄を引き受けて処刑した。なお、処刑は10日間拷問にかけ、両目を抉り、溶解した青銅を耳に流し込むという方法でおこなわれた(Plut. *Artax.* 14 = F 26)。
- 73) プルタルコス『アルタクセルクセス伝』(Plut. *Artax.* 15-16 = F 26)によれば、事件の経過は大略以下の通りである。当初ミトラダテスは、キュロスの鞍下を持ち帰ったゆえの報償という、不当評価を甘受していた。しかし、宴席でパリュサティス付きの宦官の挑発を受け、キュロスに最初の一撃を加えたのは自分であるという真実を暴露してしまう。自らの手で王位挑戦者キュロスを撃退したという名誉を喪失したアルタクセルクセスは、ミトラダテスの処刑を決定する。なおプルタルコスは、ミトラダテスがパリュサティスに譲渡された経緯については触れていない。
- 74) プルタルコス『アルタクセルクセス伝』(Plut. *Artax.* 16 = F 26)によれば、「残酷な処刑」とは飼い葉桶の刑のことであった。飼い葉桶の刑について詳しくは、本稿の註14を参照。

ティッサフェルネスの策略

F27 (68) 第21, 22, 23巻——歴史書の最終部——では、次の内容が書かれている。ティッサフェルネスがギリシア人をわなに掛け、テッサリア人メノンを仲間にし、彼を通じ策略や誓約を利用して、クレアルコスや他の指揮官を打ち負かしたことについて。クレアルコスはあらかじめ陰謀に気付き、抵抗した。しかし、大半はメノンに騙され、クレアルコスの意志に反して彼をティッサフェルネスとの会談に向かわせた⁷⁵⁾。すでに騙されていたポイオティア人プロクセノスは、クレアルコスに同行した。

クレアルコスの処刑

(69) クレアルコスと他の者たちが足枷をかけられてバビュロンにいるアルトクセルクセスの前に送られことについて。皆がクレアルコスを見るために集まったこと。パリュサティスの侍医を務めていたクテシアスが、パリュサティスのために、虜囚の身にあったクレアルコスを世話し、治療したことについて⁷⁶⁾。もしスタテイラがクレアルコスを処刑するように夫アルトクセルクセスを説得しなかったならば、パリュサティスは彼の枷を外し、自由の身にしていたであろう。クレアルコスは処刑されたが、彼の身体に奇跡が現れた。疾風が吹き、勝手に彼の身体の上に大きく盛り上がる塚が組まれたのである⁷⁷⁾。クレアルコスとともに送られてきたその他のギリシア人は、メノン以外は処刑された⁷⁸⁾。

スタテイラの毒殺

(70) パリュサティスによるスタテイラへの誹謗、ならびに次のような方法で準備された毒殺⁷⁹⁾ (スタテイラは彼女を待ち受けた運命をたどらないように、じゅうぶんに注意してい

75) クセノフォン『アナバシス』によれば、事件経過は以下の通り。休戦協定後も相互に警戒態勢が続く中で、事態の打開を図ったクレアルコスは、自らがティッサフェルネスに会見を申し入れる。クレアルコスは、会見でのティッサフェルネスの偽言を信じてしまい、主だったギリシア軍指揮官を率いて、改めてティッサフェルネス陣営に赴いたところを逮捕されてしまう (Xen. An. 2. 5. 1-32)。すなわち、クセノフォンの記述に比べて、クテシアスの記事では、クレアルコスの責任がはるかに軽減されているのである。このようなクテシアスの姿勢を評して、プルタルコスはクテシアスをクレアルコス最良と批判する (Plut. Artax. 13 = T 7b)。

76) プルタルコス『アルタクセルクセス伝』(Plut. Artax. 18 = T 7aβ)によれば、クテシアスは虜囚のクレアルコスに櫛と食料を調達した。

77) プルタルコスはこの逸話を、クテシアスの史書にはいかに作り話が多く含まれているかを示す証拠として引用している (Plut. Artax. 18 = F 28)。

78) クセノフォン『アナバシス』(Xen. An. 2. 6. 29)によれば、メノンも一年間拷問を受けた後、死んでいる。

79) プルタルコスは、この暗殺が小キュロスの反乱後に実行されたとするクテシアスと、反乱中であつたとするデイノンの両者の説を紹介したうえで、当時、ペルシア宮廷に滞在していたクテシアスの説のほうがより説得的であると、それを採用している (Plut. Artax. 6 = Ctes. F 29a = Deinon, FGvH 690 F 15a)。

た⁸⁰⁾。ナイフの片面に毒を塗り⁸¹⁾、もう片面には何もしない。それを使って卵大の小さな鳥を切った（ペルシア人はその鳥をリュンダケス⁸²⁾と呼ぶ）。この鳥が二つに切られると、パリュサティスは毒が付いていないほうの半分を手にとって食べ、毒が付いた部分をスタテイラに差し出した。スタテイラはパリュサティスが半分を手渡し、半分を食べたのを見ると、危険を予測できず、致死の毒をいっしょに食べてしまった。これによる王の母にたいする怒りと、母の宦官の逮捕、拷問と処刑。さらにパリュサティスの友人であったギンゲ⁸³⁾の逮捕と彼女にたいする裁判。しかし裁判官による放免と、王による判決とギンゲにたいする拷問と処刑⁸⁴⁾。このことによるパリュサティスの息子にたいする怒りと、彼の母にたいする怒り。

クレアルコスの墓

(71) クレアルコスの墓は、8年後にナツメヤシの樹に覆われたところを発見された。これはクレアルコスが死んだとき、パリュサティスが宦官を使って、密かに植えたのである。

-
- 80) パリュサティスとスタテイラは同じ食卓に着いていたが、互いを警戒して、同じ人に出された同じ食事をするように気をつけていた (Plut. *Artax.* 19 = F 29b)。
- 81) クテシアスによれば毒を塗った人物はベリタラス、デイノンによればメランタスという名であった (Plut. *ibid.* = Deinon, *FGrH* 690 F 15b)。
- 82) プルタルコス所伝では (Plut. *ibid.*)、リュンダケス。
- 83) プルタルコス所伝では (Plut. *ibid.*)、ギギス。クテシアスによれば、彼女は暗殺の傍観者であったが、デイノンによれば、彼女は毒薬の調合を手伝ったのだという。
- 84) プルタルコスによれば (Plut. *ibid.*)、ギンゲは幅広の大きい石の上に頭を載せられ、別の石で頭をかち割られた。これは毒殺者に課せられる刑なのだという。

エウアゴラスと王の交渉

F30 (72) 王アルタクセルクセスがサラミス王エウアゴラスと不仲になった理由⁸⁵⁾。アプリテス⁸⁶⁾からの手紙を受け取るための、エウアゴラスからクテシアスへの使者。エウアゴラスとキュプロス王アナクサゴラスの和解にかんする、エウアゴラスへのクテシアスの手紙。エウアゴラスからの使者のキュプロスへの到着、ならびにクテシアスからの手紙のエウアゴラスへの返送。

王とアテナイ人コノンとの交渉

(73) 王のもとへ赴くことにかんする、コノンとエウアゴラスの議論。彼⁸⁷⁾から受けた要求にかんするエウアゴラスの手紙。コノンのクテシアスへの手紙とエウアゴラスから王への貢物とクテシアスの手紙の返送。コノンにかんするクテシアスの王との対話と彼への手紙。エウアゴラスからサティバルザネス⁸⁸⁾への贈物の返送とキュプロスへの使者の到着。コノンの王とクテシアスへの手紙。

コノンの提督就任

(74) ラケダイモンから王への使者が監視下に置かれたことについて。王のコノンとラケダイモン人への手紙。クテシアス自身がそれらを運んだ。ファルナバズス⁸⁹⁾によってコノン

85) この節以降のフォティオスの摘要はほとんど意味をなしていないが、先行研究に基づき歴史的背景を補うと、大略以下の事件経過を伝えていることになる。

前411年、キュプロス島サラミスでフェニキア系王朝から政権を奪還したエウアゴラスは、おそらく小キュロスの反乱時の混乱に乗じて、ペルシア大王への納税を停止した (F 30. 72の「不和になった理由」)。やがてエウアゴラスはキュプロス全土に覇権を拡大していくことになるが、F 30. 72でもその前兆として他都市の王アナクサゴラス (アナクサゴラスの「キュプロス王」という肩書は不適当で、「キュプロスの一都市の王」という意味だと考えられる) との軋轢が示唆されている。いっぽうペロポネソス戦争末期の前405年、アイゴス・ポタモイの戦いで敗れたアテナイ将軍コノンは、わずか8隻の小艦隊でサラミスに亡命し、以前から親アテナイ的であったエウアゴラスによって厚遇される。前398年、スパルタを打倒しアテナイに帰還したいコノンの思惑が、東エーゲ海域からスパルタの脅威を除去したいアルタクセルクセスおよびエウアゴラスの政策と一致したため、三者は協調路線を探ることになる (F 30. 72-73)。それまでにペルシア大王と不仲になっていたエウアゴラスは関係を修復し (F 30. 73の「エウアゴラスから王への貢物」)、アルタクセルクセスと交渉を重ねた結果、艦隊建造資金を調達し、コノンを提督に就任させることに成功する (F 30. 74)。クテシアスは開戦準備の段階までしか扱っていないが、その後コノンはクニドスの海戦でスパルタ艦隊を撃破、思惑通りアテナイに帰還し、いっぽうエウアゴラスは再びアルタクセルクセスと敵対関係に入る。Cf. E.A. Costa, Jr. (1974); F.G. Maier (1994), 312-317.

なお、この交渉過程でクテシアスが決定的役割を果たしたかのような印象を受けるが、これについては疑問点も多い。詳しくは、阿部 (2007b)。

86) ペルシアの役人か。

87) 文脈から、この「彼」がコノンか大王のいずれを指すかを決定することはできない。

88) アルタクセルクセス付きの宦官。Cf. 本稿の註57。

89) ダスキュレイオン (小アジア北西部) の総督。後にアルタクセルクセス2世の娘と結婚する。

が提督になったことについて。

クテシアスの帰郷

(75) クテシアスの故国クニドスとラケダイモンへの帰還，およびロドスにおけるラケダイモン人の使者との諍いと釈放。

補足のリスト

F33 (76) エフェソスからバクトリアとインドまでの宿駅数，日数，パラサンクス単位⁹⁰⁾の距離。ニノスとセミラミスから⁹¹⁾アルトクセルクセスまでの大王表。ここで巻末。

クテシアスの作品評価

T13 クテシアスはきわめて明確で素朴な作家である。それゆえ彼の作品は，愉快である。クテシアスはイオニア方言を，ヘロドトスのごとく全体を通じてというわけではないが，いくつかの表現では用いている。彼のように，話を不適切に脇道に逸らせることもない。しかし，神話にかんしては，これを理由にヘロドトスを批判しているが，クテシアスもこの点からは逃れられておらず，『インド誌』と題された作品では特にそうである。彼の歴史書の面白味は，主に叙述の構造に由来するのであって，それは情緒的で予測できないような展開や装飾の点では神話に近いような要素を含む。彼の文体は必要以上に崩れていて，口語の段階にまで落ちている。しかしヘロドトスの文体は，この点でも他の叙述の才能や技能の点でも，イオニア方言の模範となっている。

90) 1パラサンクスは30スタディオンのあたり，1スタディオンは約180メートルにあたるため，1パラサンクスは約5キロメートル半になる計算である。Cf. Hdt. 5. 53.

91) クテシアス『ペルシア史』は，アッシュリアの王ニノスと，彼の妻で後に女王となったセミラミスの治世から書き始められている。Cf. F 1b.

(年表)

- 465年 クセルクセスの暗殺死。アルタクセルクセス1世の即位。
- 464-454年 エジプトの反乱。
- 424/3年 アルタクセルクセス1世の死。クセルクセス2世、セキュンディアノスを経て、ダレイオス2世の即位。
- 405/4年 ダレイオス2世の死。アルタクセルクセス2世の即位。
- 401年 小キュロスの反乱。
- 398年 コノンのペルシア艦隊提督就任。

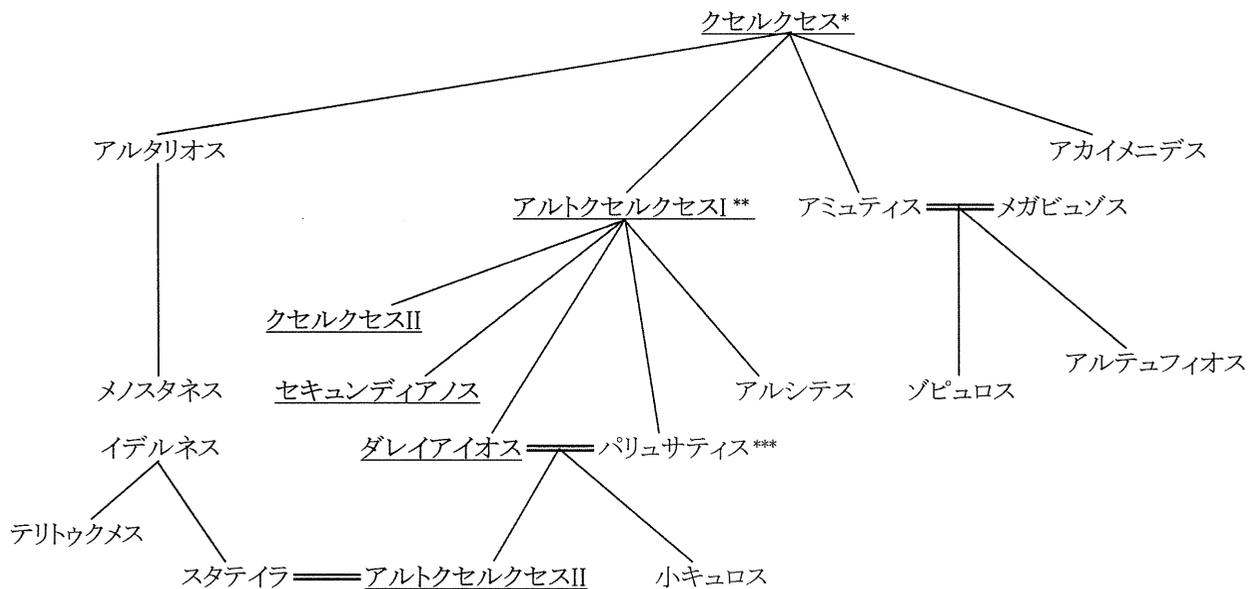
D. Lenfant (2004), 339を参考にして作成。本表は現在一般的に受け入れられている年代に基づいており、本稿におけるクテシアスの記述とは齟齬をみせる。

(引用文献)

- Bigwood, J.M. (1976), 'Ctesias' Account of the Revolt of Inarus', *Phoenix* 30, 1-25.
 — (1983), 'The Ancient Accounts of the Battle of Cunaxa', *AJPh* 104, 340-357.
 Brown, T.S. (1987), 'Megabyzus Son of Zopyrus', *AncW* 15, 65-74.
 Costa, E.A., Jr. (1974), 'Evagoras I and the Persians, ca. 411 to 391 B.C.' *Historia* 23, 40-56.
 Eck, B. (1990), 'Sur la vie de Ctésias', *REG* 103, 409-434.
 Lenfant, D. (2004), *Ctésias de Cnide: La Perse, L'Inde, autres fragments*, Paris.
 Maier, F.G. (1994), 'Cyprus and Phoenicia', *CAH²*, Vol. 6, Cambridge, 297-336.
 Stevenson, R.B. (1997), *Persica: Greek Writing about Persia in the Fourth Century BC*, Edinburg.
 Swoboda, H. (1901), 'Dareios 2', *RE* IV/4, 2199-2205.
 阿部拓児 (2007a) 「訳注・フォティオス『文庫』におけるクテシアス『ペルシア史』摘要
 ——キュロスからクセルクセスの治世まで——」『西洋古代史研究』7, 17-36。
 —— (2007b) 「歴史家クテシアスの経歴と『ペルシア史』——ペルシア宮廷滞在をめぐって——」
 『西洋史学』228, 43-57。

(本稿は平成20年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。)

(家系図)



* クセルクセスの子には、他にダレイアイオス、ヒュスタスペス、ロドグネがいる。Cf. 阿部 (2007a), 36.
** アルトクセルクセス1世の子には、他にバガパイオスがいる。また、各々の子たちの母親については、F 15. 47。
*** ここに記載されていないダレイアイオスとパリュサティスの子たちについては、F 15. 51。